

漢語サ変動詞の卓立性の再考 —動詞形・構文形比率を手掛かりとして—

李 楓 (神戸大学大学院国際文化学研究所)[†]

Reconsideration of Lexical Status of Sino-Japanese-Verbs - From the Perspectives of Verb Form and Sentence Structure -

Feng Li (Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University)

要旨

漢語サ変動詞の中には、ほぼ「～する」の動詞形でのみ使うものもあれば、「～をする」の構文形と併用するものもある。同じ漢語サ変動詞であっても、これらは語としての位置づけに、質的な違いが存在すると考えられる。従来の漢語サ変動詞研究において、この点は未だ十分に解明されていないが、個々の漢語サ変動詞が構文形を持つか否かを考えることは、日本語記述の精緻化を図るうえでも、また日本語学習者に適切な情報を提供するうえでも重要であると考えられる。本研究では、李(2013)で特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語をサンプルとして、それらの語の動詞形、及び構文形使用状況をコーパスを用いて調査した。その結果、漢語サ変動詞は、構文形を志向するものと動詞形を志向するものに峻別されることが明らかになった。その後、重回帰分析を実行することにより、構文形併用の程度を説明するモデルの検討を試みた。

1. はじめに

いわゆる漢語サ変動詞は「～する」という動詞形を取るが、語によって、漢語部と「～する」の間に「を」を加えた「～をする」という構文形が併用される場合もあれば、構文形がほとんど使用されない場合もある。たとえば、「勉強する」についていえば、「勉強をする」という構文形も一般的である。一方、「反映する」についていうと、その構文形「?反映をする」は不自然に感じられる。このように、漢語サ変動詞は、対応する構文形を持つか持たないか、また持つとすれば、どの程度の割合で構文形が使用されるかという点において、一定の幅を持っていると言えるだろう。

ある漢語サ変動詞が対応する構文形を持ち、また構文形が相当程度用いられる場合、当該の意味は2種類の表現形で伝達されることとなり、意味表出手段としての漢語サ変動詞の唯一無二性、つまり卓立性は一定の制約を受けていると言える。これに対し、漢語サ変動詞が対応する構文形を持たない場合、当該の意味の伝達は漢語サ変動詞だけが唯一無二的に担っていることとなり、漢語サ変動詞はより卓立的な位置づけを持つと考えられる。先行研究もこうした現象に関心を寄せていたが、その多くは、漢語サ変動詞(動詞形)をデフォルトと見なしながら、それが構文形を取り得る際の言語的条件の解明を目指すものであった。一方、コーパスを使用し、個々の漢語サ変動詞の構文形併用率、つまりは本稿で言う漢語サ変動詞の卓立性を計量的に調査した研究は必ずしも多くない。漢語サ変動詞の卓立性の計量的調査は、言語記述の精緻化を図るうえで言語学的な意義を持つのみならず、日本語教育の観点からも重要である。

一般に、教育の現場では、ある文法形式を指導する場合に、典型的な用例を提示するこ

[†] lifengwang2006team@yahoo.co.jp

とが重要であると考えられている。典型性は一般にコーパス頻度で読み替えられ、様々なテキストで満遍なく高頻度に出現する語が典型例と見なされがちである。事実、李(2013)においても、そうした観点から、コーパスに含まれる多様な言語種別(ジャンル)において等しく頻出する漢語サ変動詞の特定を行った。しかしながら、仮にそうして選ばれた語が、高い構文併用性を持ち、動詞形自体の意味表出手段としての卓立性・単独性が低いとすると、学習者に提示すべき漢語サ変動詞用例としての典型性は弱まることとなろう。つまりは、様々な日本語において、高頻度かつ汎用的に出現するだけでなく、同時に、対応する構文形を持たない(あるいは持つとしても、そうした頻度がきわめて低い)ものがより妥当な典型用例になると考えられる。

以上の点をふまえ、本研究では、すでに特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞をサンプルとして、その卓立性の再考を試みる。このことは、あわせて漢語サ変動詞の卓立性がどのようなテキスト内の・テキスト外的要件によって影響されているかの解明にもつながる。

2. 先行研究

漢語サ変動詞については多くの研究がなされており、「～する」と「～をする」の交替の問題を論じた研究もいくつか見られる。ここでは、主要なものに限って、先行研究を概観したい。当該問題を扱った研究は、主として理論的立場に基づくものと、主として計量的立場に基づくものとに二分される。はじめに、理論的立場に立脚するものとして、田野村(1988)、影山(1993)、Uchida & Nakayama(1993)、平尾(1995)、松岡(2004)を概説する。なお、以下では、「～する」の形を動詞形、「～をする」の形を構文形と呼ぶ。

田野村(1988)は、動詞形(複合サ変動詞と称されている)と構文形(単純サ変動詞と称されている)の両方の形が表現としては成り立つが、日本語としての自然さに違いが存在する場合を検討している。氏によれば、構文形が成立するためには、(1)当該語が「する」(=「行う」)と言うに足る動作・行為を表していること、(2)動詞概念部それ自体が「行う」ことを表していないこと(例、a. 計画を実行する。b. ? 計画の実行をする。)、(3)動作対象に対する別の動作・行為の表現が後続する同一の文脈に存在していないこと(意味的勢力)(例、a. ? シャツの洗濯をして干した。b. シャツの洗濯をして外出した。)、の3つの条件が必要であるという。さらに(1)については、細かく(1-1)意図的な事柄を表していること(意図性)(例、a. 警察は毒物を検出した。b. ? 警察は毒物の検出をした。)、(1-2)し始め、し終わるような性質の事柄を表していること(アスペクト性)(例、a. 九時に受付を開始する。b. ? 九時に受付の開始をする。)、(1-3)純粹な心理的事柄を表していないこと(物理性)(例、a. 優勝の祈願をする。b. ? 優勝の期待をする。)の3点が導かれるとされている。逆に、動詞形が成立する場合、動詞概念部が動作・行為を表すことは必須でないとされている。

影山(1993)は、構文形が成立するには、漢語名詞部分が意図的に動作を行う動作主を主語に取るような非能格名詞(例、a. 家族をそろって食事をする。b. 離婚をする。)であることが要求されるとしている。意図を持たず、受動的に事象に係る対象を主語にとる非対格性を持つ名詞(例、a. *持っていたピストルが暴発をした。b. *老人が会談で転倒をした。)の場合、構文形は成立せず、動詞形が使用されると論じている。

Uchida & Nakayama(1993)では、当該動詞が行為・達成動詞である場合に、構文形が成立するという。行為・達成動詞とは、漢語名詞に「～ている」が結びついた場合、動作の継続が含意されるような動詞であり、「研究する」などがその例である。一方、当該動詞

が到達・状態動詞である場合には、構文形は成り立たず、動詞形が使用されるという。到達・状態動詞とは、漢語名詞に「～ている」が加わる場合、結果の状態を含意するような動詞であり、「開始する」などがその例である。

平尾（1995）は、構文形が成立するには、「～しよう」「～したい」などと共起できる程度の意志性を持った漢語名詞が必要であるとしている（例、a.勉強しよう。→勉強をする。b.選択しよう。→選択をする。）。

松岡（2004）は、従来の研究で提唱されていた意志性や時間幅などの概念では説明がつかない場合があることを指摘しながら、動詞形と構文形の交替条件を改めて検討している。氏は構文形が成立するには、「事象への関与が高い」ことが必要であるとし、以下の2つの場合を説明している。一つ目は、主語が意志的に行い、その事象に持続性がある場合である（「責任をもって～をする」という表現と共起しうる。例、a.勉強をした。b.練習をする。）。二つ目は、主語が意志性や主体性を持たないが、事象の結果が主語に返ってくる（「再帰性」を持つ）ような場合である（「自分が～したのは自分の…からだ」という表現と共起しうる。例、a.怪我をした。b.失敗をした。）。

以下に、これらの主要先行研究の内容を一覧にまとめる。

表1 主要先行研究にみる構文形の成立条件

田野村（1988）	(1) 動作・行為性 (a.意図性、b.アスペクト性、c.物理性)、 (2) 主語非動作性、(3) 文脈統一性
影山（1993）	名詞非能格性（意図性・能動性を持つ動作主を主語にとる）
Uchida & Nakayama（1993）	行為・達成動詞＝動作の継続性
平尾（1995）	意志性（「しよう」、「したい」と共起しうる）
松岡（2004）	事象への強関与性（意志性は問わず）

以上の理論的研究に加え、若干ではあるが、量的研究も存在する。その一例は、田辺・中條・船戸（2012）である。同研究は、中條・木下・田辺・内山・西垣（2010）で選定された漢語動名詞上位語について、コロケーションを調査した。その結果、構文形（選挙をする）や、他の漢語名詞との結合形（選挙活動）で使用される名詞用法中心語と、主として動詞形（実施する）で使用され、構文形（? 実施をする）や漢語名詞結合形（? 実施活動）などでほとんど使用されない動詞用法中心語の2種類が存在することが明らかにされた。この研究は、漢語の用法分析にコーパスを使用した興味深い取り組みであるが、本研究が問題とする漢語サ変動詞（動詞形）と構文形の差異に違いを絞ったものではない。

このように、漢語サ変動詞（動詞形）と構文形の交替する条件について、先行研究では動作性・意志性など、非常に有用な知見が得られた。しかしながら、量的アプローチに基づく研究の余地はまだ多く残されていると言える。

3. リサーチデザイン

3.1 研究目的

すでに述べたように、漢語サ変動詞の卓立性を計量的に明らかにしようとした研究はきわめて限られている。ゆえに、本研究では、高頻度で汎用的な漢語サ変動詞をサンプルとして、重要な漢語サ変動詞の卓立性を検討する。これにより、学習者に提示すべきより典

型的な漢語サ変動詞を抽出し、あわせて漢語サ変動詞の卓立性がどのようなテキスト内の・テキスト外的要因と関係しているかを検討することを目的とする。

3.2 対象

漢語サ変動詞には、様々な語が含まれるが、漢語サ変動詞全体の大まかな特徴を捉えようとする場合、それらの中で、特に高頻度で汎用的な語をサンプルとして分析を進めることが妥当である。そこで、本研究では、李(2013)において特定された93語の漢語サ変動詞をサンプルとする。これらは「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を構成する書籍、雑誌、新聞、ブログ、白書、知恵袋の6種を含む、計15変種(書籍は内容別10ジャンルをそれぞれ別個のデータとして扱う)から得られた出現頻度値を主成分分析によって合成した統計指標値を手掛かりに選ばれたものである。以下では、抽出された93語を提示する。抽出過程の詳細は李(2013)を参照されたい。

表2 高頻度・汎用的漢語サ変動詞リスト

	語		語		語		語		語		
1	存在する	17	注意する	33	要求する	49	発売する	65	実行する	81	分類する
2	利用する	18	開催する	34	完成する	50	意識する	66	変更する	82	安定する
3	紹介する	19	構成する	35	判断する	51	移動する	67	拡大する	83	観察する
4	説明する	20	評価する	36	成功する	52	指定する	68	解決する	84	保存する
5	使用する	21	設定する	37	設置する	53	強調する	69	解放する	85	心配する
6	確認する	22	変化する	38	決定する	54	発展する	70	比較する	86	重視する
7	理解する	23	提供する	39	作成する	55	増加する	71	集中する	87	考慮する
8	表示する	24	形成する	40	選択する	56	開発する	72	購入する	88	販売する
9	発見する	25	実現する	41	開始する	57	否定する	73	発揮する	89	想像する
10	発生する	26	表現する	42	採用する	58	提出する	74	一致する	90	活用する
11	注目する	27	展開する	43	登場する	59	反映する	75	無視する	91	限定する
12	指摘する	28	参加する	44	認識する	60	規定する	76	維持する	92	減少する
13	期待する	29	検討する	45	予想する	61	代表する	77	適用する	93	区別する
14	実施する	30	意味する	46	成立する	62	掲載する	78	確立する		
15	用意する	31	対応する	47	報告する	63	支配する	79	記載する		
16	発表する	32	主張する	48	導入する	64	結婚する	80	勉強する		

3.3 リサーチクエスション

すでに述べたように、先行研究からは多くの知見が得られたものの、未だ解明されていない点もある。たとえば、様々な漢語サ変動詞のうち、動詞形に加えて、構文形併用性の高い語と低い語にはどのようなものがあるか、言い換えれば、漢語サ変動詞の卓立性が低い語と高い語にはどのようなものがあるか、また、漢語サ変動詞の卓立性の高い語と低い語にはどのような共通特徴があるか、漢語サ変動詞の卓立性は、漢語部の頻度・意味数・語構成、漢語サ変動詞のアスペクト性・自他性、漢語サ変動詞の使用される言語変種(ジャンル)、といった様々な特性とどのように関係しているかは十分に解明されていない。

以上をふまえ、本研究で明らかにしようとするリサーチクエスションとして、以下の3点を設定した。

RQ1: 高頻度・汎用的漢語サ変動詞はそれぞれどのような卓立性を持つか?

RQ2: 漢語サ変動詞卓立性の高い語と低い語はどのような共通特性を持つか?

RQ3: 漢語サ変動詞の卓立性を説明する統計モデルはどのようなものであるか?

3.4 研究手順

本節では、RQ ごとに研究の手順を簡潔に紹介する。

まず、RQ1 (漢語サ変動詞の卓立性) については、すでに述べた BCCWJ の 15 変種を対象として、動詞形および構文形の頻度を調査する (頻度調査は変種ごとに行うのではなく、全変種を統合したデータに対して行う)。その後、動詞形と構文形の頻度の和に占める動詞形頻度の比率 (動詞形使用率) を求め、これを以下の分析における卓立性指標値と見なす。なお、本調査にあたっては、漢語部に他の漢語が結合しているもの (例、自己紹介する) や、「を」と「する」の間に他の要素が付加されているもの (例、確認を繰り返す) は対象から除外する。その後、各語の卓立性指標値を手掛かりにして、全体を降順に並べ替える。

次に、RQ2 (卓立性の高いものと低いもの特性) については、卓立性指標に基づき、値が高いものおよび低いものについてそれぞれ BCCWJ からランダムに用例を抽出し、特に先行研究で示されてきた構文形の許容基準を参考にして質的な考察を行う。

また、RQ3 (漢語サ変動詞卓立性の説明モデル) については、複数の説明変数で単一の目的変数を説明・予測する重回帰分析を行う。目的変数は 93 語それぞれの卓立性指標値 (動詞形使用率) である。この値に影響を及ぼし得る説明変数の候補としては様々なものが考えられるが、ここでは、漢語サ変動詞の核となる漢語部に関わるパラメータと、語幹部に「する」が付加された漢語サ変動詞に関わるパラメータ、の 2 つを想定し、それぞれ以下のような説明変数を設定する。

表 3 漢語サ変動詞の卓立性に関与する要因候補

漢語部に関わる特性	漢語サ変動詞に関わる特性	
頻度・意味・語構成的特性	文法的特性	環境的特性
(1) 頻度	(4) アスペクト性	(6) 非公式ジャンル出現性
(2) 意味数	(5) 自他性	(7) メディアジャンル出現性
(3) 語構成パターン		

テキスト内の

 テキスト外的

上記の各要素のうち、(1) (2) (6) (7) はそれぞれ一つの説明変数しか持たないが、(3) は 5 種、(4) は 2 種、(5) は 3 種の説明変数を持つ。これらを合わせると、全体で説明変数の数は 14 種となる。以下、それぞれについて詳しく述べる。

(1) 頻度については、個々の漢語サ変動詞の漢語部の頻度データを使用する。その際、粗頻度そのものを使用すると、圧倒的に値が高くなり、重回帰モデル内で過剰な重みづけが与えられる可能性があることから、ここでは、粗頻度を自然対数に変換して使う。自然対数化により、大きな値が効率よく圧縮され、ほかの説明変数候補と比較的近い範囲に値が収束することとなる。(2) 意味数については、漢語部について、辞書の当該項目内で言及されている意味の総数を調査したデータを用いる。辞書によって意味の数は異なる場合が多いが、本研究では、一般に広く使用されている辞書の一例として、『大辞林 第三版』(三省堂、2006) を参考資料とする。たとえば、「紹介」の場合、同辞書は、①知らない人どうしを引き合わせる事、なかだちをすること (「家庭教師を一する」「アルバイトの一」「自己一」と、②未知の物事を広く知らせること (「日本文化の一」と) の 2 つの意味を記載しているため、意味数は 2 となる。(3) 語構成パターンについては、漢語部を構成する 2 つの漢字間の意味的結合関係を 5 種類に区分したデータを使用する。区分は李 (2013) に基づ

くもので、並立関係（選択など）、修飾関係（活用など）、客体関係（読書など）、補充関係（拡大など）、実質関係（否定など）の5種類である。(4) アスペクト性については、金田一（1950）に基づく継続動詞と瞬間動詞の2分類を使用する。金田一（1950）は日本語の動詞をアスペクトの観点から、状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞の4種類に分類しているが、漢語サ変動詞には、状態動詞と第四種の動詞の分類は該当しないため、継続動詞と瞬間動詞の2種類の可能性がある。継続動詞は動作・作用を表し、その動作の継続があるものとされ、瞬間動詞は動作作用を表すが、その動作が一瞬にして終わるものであるとされている。(5) 自他性については、李（2014）の調査に基づき、自動詞、他動詞、自他両用動詞の3分類を用いる。同研究は先行研究をふまえ、「～を」格を持ち、かつ、対象に対する「働きかけ」が認められるものが他動詞、それ以外は自動詞としている。(6) 非公式ジャンル出現性については、当該語がコーパス内の15種のジャンル中、非公式性の強い2ジャンル（ブログと知恵袋）における出現率データを使用する。ブログと知恵袋は、インターネット上の自由な発言の場であり、校閲のプロセスを経ていないため、言語としての公式性が低いと考えられる。(7) メディアジャンル出現性については、当該語がコーパス内の15ジャンル中、メディア性の強い2ジャンル（雑誌と新聞）における出現率データを用いる。雑誌や新聞は、圧倒的に大多数の読者を対象として、正確かつ適切な表現となるよう、慎重な校閲を行ったテキストと言える。単に非公式ジャンルに対する公式ジャンルと考えれば、ほかに政府刊行の白書類なども候補となるが、ここでは、読者層が圧倒的幅広い雑誌と新聞に限り、前述の非公式ジャンルの対称ジャンルとした。

なお、重回帰分析において、説明変数をモデルに投入する場合、「全変数導入法」と「変数増減法」の2つの方法が存在する。前者は手元の説明変数をすべて使って回帰モデルを作りたい場合に、後者は多数の説明変数候補の中から最適な変数の数を決めたい場合に使用される手法である（石川・前田・山崎、2010、p. 116）。ここでは、両者をともに実行し、結果を解釈することで、候補としたすべての変数の位置づけを確認すると同時に、より最適なモデルを求める。以上の処理には Seagull-Stat 2010 版を使用する。

4. 結果と考察

4.1 漢語サ変動詞の卓立性

漢語サ変動詞 93 語を卓立性に基づいて並べ替えた結果、表 4 が得られた。また、漢語サ変動詞の卓立性指標値を「～90%」、「90%～92%」、「92%～94%」、「94%～96%」、「96%～98%」、「98%～」の6段階に区分し、それぞれの指標値レンジに含まれる語の数の比率を調べた結果、図 1 が得られた。

表 4 卓立性順漢語サ変動詞リスト（漢語部のみ）

語	比率	語	比率	語	比率	語	比率	語	比率
反映	100.00	限定	99.88	形成	99.69	検討	98.91	選択	96.22
発揮	100.00	安定	99.87	支配	99.68	変化	98.88	対応	96.09
一致	100.00	導入	99.87	作成	99.68	指摘	98.86	注意	96.07
確立	100.00	考慮	99.86	否定	99.66	無視	98.86	決定	95.75
重視	100.00	適用	99.84	構成	99.66	保存	98.85	表現	95.54
増加	99.98	減少	99.84	意識	99.63	移動	98.80	用意	95.43
存在	99.98	維持	99.83	発売	99.62	紹介	98.58	判断	95.41
完成	99.96	成功	99.80	購入	99.52	期待	98.57	心配	95.21
集中	99.96	拡大	99.79	参加	99.45	指定	98.53	設定	94.98
成立	99.95	掲載	99.77	認識	99.36	区別	98.26	説明	94.83
開始	99.95	活用	99.77	発展	99.29	比較	98.24	報告	94.42

開催	99.94	注目	99.77	分類	99.28	想像	98.19	理解	94.30
実施	99.94	代表	99.76	提供	99.24	観察	97.83	評価	93.32
登場	99.93	使用	99.76	記載	99.23	開発	97.77	発見	91.38
強調	99.93	提出	99.74	解決	99.12	主張	97.52	勉強	83.73
意味	99.93	実行	99.73	発表	99.11	要求	97.42	確認	79.54
実現	99.91	解放	99.72	予想	99.07	販売	97.16	表示	77.61
利用	99.90	規定	99.70	展開	99.04	結婚	96.98		
設置	99.88	採用	99.70	発生	98.94	変更	96.78		

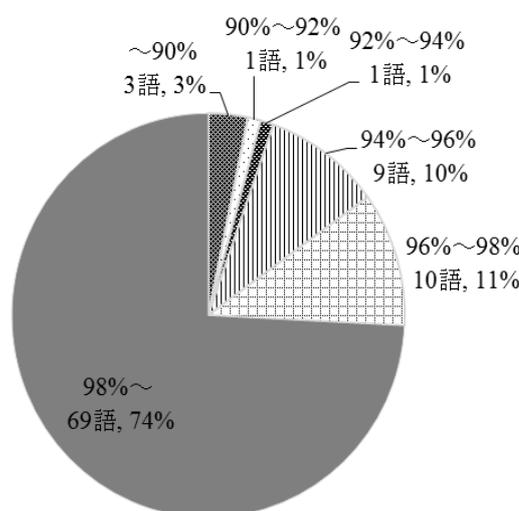


図1 卓立性指標レンジごとの漢語サ変動詞数比率

ここでは、上記よりわかることとして2点を示す。1点目は、サンプルとした93語のうち、90語において卓立性が90%以上となったことである。これは、統計的手法を用いて特定された高頻度・汎用的漢語サ変動詞の大部分が動詞形・構文形の併用という観点から見ても、高い典型性を持っていることを裏付ける結果と言える。

2点目は、ごく一部において、漢語サ変動詞の卓立性が低いものが含まれていたということである。該当するのは、指標値が90%未満となった「勉強」「確認」「表示」の3語である。これらの3語は各種の漢語サ変動詞の中で高頻度かつ汎用的な語ではあるが、当該の意味を表出しようとする場合、動詞形に加えて、構文形も一般的に併用されることが示されている。漢語サ変動詞の「典型用例」を狭義で捉えた場合、これらの3語をそこに含めるかどうかについては、今後再検討の余地がある。

いずれにせよ、こういった点は従来の日本語研究においても、日本語教育においてもほとんど注目されてこなかった。漢語サ変動詞の卓立性指標に基づく本調査は、従来の研究・教育に新たな視点を示したものであると言える。

4.2 卓立性の高いものと低いものの特徴

前節の分析結果をふまえ、卓立性の高い漢語サ変動詞として、指標値が100%となった「反映」「発揮」「一致」「確立」「重視」の5語、及び卓立性が低いものの例として、指標値が90%未満となった「勉強」「確認」「表示」の3語に注目し、それぞれの用例を質的に検討する。まず、卓立性の高い5語について用例を見てみよう。これらは現代日本語書き言葉均衡コーパスの15変種において、構文形が一例も確認されなかったものである。

(1) 密着したものとなるに従い、道路交通をめぐる国民の意識、要求は、それぞれの立場を反映し、多様化してきている。(白書 OW1X_00441)

(2) ベレッタにとりつけられた新品のサイレンサーは、見事に効力を発揮した。(書籍・文学 LB19_00257_6370)

(3) 振込人名とイーバンク口座名が一致しない場合、対象となりませんのでご注意ください。(知恵袋 OC14_02242_700)

(4) 近習の地位を得たことは、生活の基盤が確立したという芽出たいことなのであるから、杯酒に沈湎して、自分は才能が発揮できないなど・・・(書籍・文学 LBg9_00012_16230)

(5) おれが仕事を重視するのが、どうしてもこの人には納得できないことだったのかもしれない、と。(書籍・文学 PB39_00045_56460)

上記の用例を用い、構文形が許容されない理由を田野村(1988)で示された構文形成立条件に基づいて考察する。前述のように、田野村(1988)によれば、構文形の成立条件としては、(A)意図性、(B)アスペクト性、(C)物理性、(D)概念部非動作性、(E)意味的勢力、の5点が必要であるとされている。ただし、(D)と(E)の2点は語に関係する条件ではなく、むしろ語が出現する文型・文脈という外的な条件であると考えられる。よって、ここでは、主として語と直接に関わる条件としての(A)(B)(C)の3点に注目して分析を行う。上記の用例を見てみると、(1)の「反映する」は、主語は「意識・要求」であって、まず(A)の意図性という条件は満たさない。また、「?反映し始める」や「?反映し終わる」のように、(B)アスペクト性も表しにくい。(2)の「発揮する」は無生物の「サイレンサー」が主語であるため、(A)の意図性を表していない。(3)の「一致する」と(4)の「確立する」は、単に事象の様態や状態を表しているため、(A)の意図性も(C)の物理性も備わっていない。(5)の「重視する」は、動作・行為というよりも、単に心理的活動を表しているため、(C)の物理性は認められない。これらの点をふまえると、以上の5語の卓立性が100%となり、構文形が許容されないことは説明がつく。

次に、卓立性が相対的に低い3語について用例を見てみよう。これらは当然ながら動詞形と構文形の両方を持つが、以下に示すのは構文形の用例である。

(1) いっしょに、近づきつつある秋の中間試験のための勉強をしていたので、すっかりおそくなってしまったのである。(書籍・文学 PB29_00130_9540)

(2) また、一端選択受信を設定し、件名を読み込みに行って、メールの確認をする方法もあります。※選択受信については、下記URLをどうぞ。(知恵袋 OC02_09229_1970)

(3)・・・また、ドアがきちんと閉まっていない場合は加熱しないてくださいという表示をしてください。(書籍・社会科学 LBm3_00019_11270)

上記について、同じく田野村(1988)の枠組みに基づいて構文形が許容される理由について確認しておきたい。まず、(1)の「勉強」について言うと、主語は人であり、「中間試験のため」という行為には明確な(A)意図性が備わっており、かつ「勉強」という行為には「勉強していた」のように、明白な(B)アスペクト性の事柄を表しており、単純な心理的活動ではないため、(C)物理性も持つと考えられる。(2)の「確認」は何らかの目的を持ち、メールをチェックする行為を表していると想像がつくため、(A)の意図性も(C)の物理性も認められる。また、この動作・行為は一定の期間をわたってのことであるため、(B)のアスペクト性も備わっている。(3)の「表示」についても、前後の文脈からも分かるように、何らかの目的を持ち、かつ動作・行為は一定の時間幅を持つものであるため、(A)意図性、(B)アスペクト性、(C)物理性の3つの特性をすべて備わっていると考えられる。このように、これらの例は、いずれも先行研究で提唱された構文形の成立条件にあてはまり、先行研究の議論を支持したものであると考えられる。

以上より、卓立性が高いものと低いものがそれぞれ一定の共通特徴を持ち、その特徴の大部分が先行研究で示された枠組みで説明できることが確認された。

4.3 漢語サ変動詞卓立性の説明モデル

まず14種の説明変数を用いて、全変数導入法で重回帰分析を行ったところ、下記の回帰式が得られた。

卓立性指標 = $-941.1 - 1.071$ [頻度] -0.611 [意味数] -477.9 [並立関係] -477.0 [修飾関係] -477.5 [客体関係] -477.5 [補充関係] -474.8 [実質関係] $+0.309$ [継続動詞] $+0.111$ [瞬間動詞] $+1529$ [自動詞] $+1526$ [他動詞] $+1527$ [自他両用] -0.0977 [非公式] $+0.336$ [メディア]

上記のモデルは有意 ($p < .05$) であり、決定係数は.23、自由度調整済相関係数は.31 となった。このことから、モデルは一定の有効性を示しているように思われるが、 $VIF < 10.0$ となり、変数間の多重共線性が認められた。このモデルは妥当性に制約のあるものではあるが、それぞれの説明変数に付与された係数に注目すると、漢語部の頻度が低く、意味の数が少なく、並立関係・修飾関係・客体関係・補充関係・実質関係といった明確の構造を持たず、継続動詞ないしは瞬間動詞であり、かつ自動詞・他動詞・自他両用動詞のいずれかの性質を持ち、かつ非公式なジャンルであまり使用されず、むしろ、多くの読者に向けて校閲を重ねたメディアジャンルにおいて多く出現する場合、漢語サ変動詞の卓立性が上昇するという全般的な傾向が示された。この結果から、本研究で設定した説明変数の候補のうち、漢語サ変動詞の卓立性は、漢語部の語構成パターン（並立・修飾・客体・補充・実質）や、漢語サ変動詞のアスペクト性（継続動詞・瞬間動詞）や自他性（自動詞・他動詞・自他両用動詞）からははっきりした影響を受けていない可能性があり、むしろ、漢語部の頻度や意味数、あるいは漢語サ変動詞の使用される言語環境とより密接に関わることが示唆された。

ただ、すでに述べたように、全変数導入法による説明モデルは変数間の多重共線性を含み、必ずしも妥当なものではない。そこで、変数増減法により変数の取捨・整理をしたところ、以下のモデルが得られた。

卓立性指標 = $108.9 - 1.198$ [頻度] -0.521 [意味数] $+1.968$ [自動詞] -0.0937 [非公式] -0.333 [メディア]

上記のモデルは有意 ($p < .05$) であり、決定係数は.22、自由度調整済相関係数は.42 となった。相関係数に注目すると、全変数導入法に比べ、より妥当性の高いモデルになっていることが確認される。また、 VIF 値はいずれも 10.00 を超えていないため、多重共線性の問題もなく、全体としてより妥当で有効なモデルであると考えられる。

モデル中の変数に付与された係数に注目すると、漢語部の頻度が低く、意味数が少なく、漢語サ変動詞の自動詞性が強く、ブログや知恵袋のような非公式ジャンルではなく、雑誌や新聞のようなメディアジャンルで多く使用される場合に、漢語サ変動詞の卓立性が高まるという傾向が示された。大きな枠組みはすでに全変数導入法で見た場合と変わらないが、新たに自動詞性が漢語サ変動詞の卓立性に関係する指標として加わったことが重要であろう。

もちろん、この結果は 93 語という限られたサンプル語についてのみあてはまるもので、漢語サ変動詞全体の卓立性の説明モデルとしては決して十分なものではない。しかしながら、漢語サ変動詞の卓立性、あるいは構文形併用性を多様な観点から検討したことは、従来の漢語サ変動詞に関わる研究や日本語教育に新たな視点を加えたものとなりうるであろう。

5. まとめ

本研究では、李(2013)で特定された漢語サ変動詞93語をサンプルに、漢語サ変動詞(動詞形)と構文形の使用状況をあわせて調査することにより、各語の漢語サ変動詞の卓立性を確認した。以下、リサーチクエスション順に結論をまとめる。

まずRQ1では、サンプルとした93語のうち、90語において卓立性が90%を上回り、高頻度汎用的漢語サ変動詞は、動詞形・構文形の選択という観点から見ても高い卓立性を持つことが確認された。一方で、「勉強(する)」「確認(する)」「表示(する)」のように、相対的に卓立性の低い語が存在することも示された。

次にRQ2では、漢語サ変動詞の卓立性の高い語と低い語をそれぞれBCCWJから用例を抽出し、田野村(1988)で提唱された構文形成立条件(意図性、アスペクト性、物理性、概念部非動作性、意味的勢力)について確認を行った。

最後にRQ3では、重回帰分析により、漢語部の頻度が低く、意味数が少なく、漢語サ変動詞が自動詞的に使用され、インターネット上の非公式ジャンルであまり使用されず、雑誌や新聞のようなメディアで多く使用される場合に、漢語サ変動詞の卓立性が高まることを確認できた。また、漢語部の頻度や漢語サ変動詞の使用環境などに比べると、漢語部の語構成パターンなどの影響は限定的であることも確認された。

以上のように、本研究は、漢語サ変動詞の動詞形・構文形使用に注目し、従来の研究では十分に検討されてこなかった漢語サ変動詞の卓立性について調査し、有益な知見を得た。この点をふまえれば、本研究は従来の漢語サ変動詞に関わる研究や日本語教育に新たな視点を加えたものとなりうる。ただし、得られた知見は、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限ったもので、漢語サ変動詞全体の特性として捉えうるかどうかを今後の課題としたい。

参考文献

- 石川慎一郎、前田忠彦、山崎誠(編著)(2010)『言語研究のための統計入門』、くろしお出版
 Uchida. Y. and Nakayama. M. (1993) Japanese verbal noun constructions. *Linguistics*.31(4), pp. 623-666
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』、ひつじ書房
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』(日本言語学会)15、pp.48-63、
- 田辺和子、中條清美、船戸はるな(2012)「新聞コーパスにおける二字漢語動名詞の動詞的・名詞的ふるまいについて」『日本女子大学紀要』61、pp.19-32
- 田野村忠温(1988)「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』」『日本語学』7(11)、pp.70-80、明治書院
- 平尾得子(1995)「VNがスルとVNスルとVNヲスル—サ変動詞語幹と構文的制約—」宮島達夫、仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』、pp.89-98、くろしお出版
- 松岡知津子(2004)「漢語名詞とスルが構成する2種類の述語の交替」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2(53)、pp.305-310
- 松村明(編)(2006)『大辞林 第三版』、三省堂
- 李楓(2013)「現代日本語における汎用的漢語サ変動詞の抽出とその内部構成の検討」『国立国語研究所第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.101-110
- 李楓(2014)「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の諸相」語彙研究会第101回例会発表資料、愛知学院大学